





越後国春日陣屋内
田村平三郎

お梅子る

第一

梅



長次磨

紅梅や花銀公乃あまの
翠乃枝と見ゆ家老柳 友仙
堤つ春乃日く絶ふ又つ冬 心夏
よしや河を流道ゆま筑前 志
松吹りそら名とても松島 雲
かりハ鷹よそく山とて小浜 可頼
月乃まの赤又田面子種と逢 政信
残で音聞とてうす漁人 出久



ひきし世や終る所後何れを交 友仙
ゆりと興でふんがむうの家 友仙
氏あふて年かじじがなき染 孝仁
あつて何れかいつういふも 友仙
後何れ何れかいつういふも 友仙
さのまつり乃洗濯セシタラせじ 友仙
も食居居るらいつういふも 友仙
小神小町り曾やせくら 友仙
河原もどれかいつういふも 友仙
月りたつていふ大臣の地と 友仙
急きおのやせくら 友仙
んておのやせくら 友仙
嘆き分んもせくら 友仙
初来よりおのやせくら 友仙

毛采るも子部乃終る所 友仙
長者の家とつらいつういふも 友仙
市りりりりりりりりりりり 友仙
まんあつていふも 友仙
あつていふも 友仙
むんあつていふも 友仙
唱えしとておのやせくら 友仙
いふもいふもいふも 友仙
善法りいふもいふも 友仙
あつていふもいふも 友仙
天乃よとていふもいふも 友仙
ちあひつもいふもいふも 友仙
交りいふもいふもいふも 友仙
地乃よとていふもいふも 友仙

身あめり事りゆはな地蔵を 雲の
目とまじくもて居侍を中 雲
志神んが付ぬまの行乃着てな 雲
かひ小外白のわらひ日いり 雲
月乃地おひたそと入るにり 雲
君とらもま寸靈ハ松を路 友仙
ともしたは月し流るま 友仙
とめさふたけはるりたじ 雲
た月良乃加城乃よまの所 政法
をひハ流るまの芳もま 雲
あよつよ若月光乃物り 友仙
脱痛風も秋も之陣 友仙
ゆハ華紅糸ふり名とあめ 雲
身乃とこのし雲成のふ 雲

方丈とそくおひにあり 雲
維摩經もあゆくとし 雲
法賢のの掛地おれおひ 雲
正家あり乃挨拶んま 雲
まのめくふまもひまうん 雲
さおのまれまの春とん 政法
泳せおの春乃林舟のま 雲
さくくも花乃玉やとぬん 雲
あくと結をひくやうか雲 雲
物事りあつらふまもれ 友仙
形も井は高り守れおの 政法
鞠の秘曲となへまのま 雲
月乃花の影れどおがらり 友仙
穉やふまのそひ聲入 雲

十ののちより人れなきあひ改法
 又百羅漢の法くそなりえ 義
 びるの羅集とする也末福習 安鈴
 美りい誰もれんを交結い 友仙
 うらへん四もあふぬの 可乾
 あれりあもあふぬの 治番 義
 拾遺もあふぬの 十はして快観 義
 くれぬあふぬの じくからんあり 義

- 長丸 廿 可乾 九
- 友仙 十三 政信 十三
- 正章 十七 長久 一
- 季吟 十五
- 安鈴 十二

第二 珠

身もあまみ行つるひやうひん
 御世のひより照えぬ春 義
 月まも初子^{ツ子}あまをいひて 友仙
 足形をいしとゆふ玉帯 安鈴
 際雪の乃すら作ふ在ふ 可乾
 くまはなひそくあふあ物 政信
 よれつひの稀なるあまをいひて 義
 りてむらむ乃あふぬをいひて 義

季吟

ひんがしむらひてくろを真
葉くらひのちうあはさる又枝
ゆいばじとまきとくおの橋の
おれよりおとよむむ難波寺
伶人やまゝの歳はあやうん
せとれつえい在原乃姓
岩の姉妹と地れたりは
補正れあすあういふ乃陰
はあすえとくくは流連有
小舟の河内乃月乃く繩
男にめてさする嫂介の物
何くくふ寝はあは平枕
くんあらしとくく後おの抱
ほかりくくく極もまき
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙
友仙

舟のあは子孫と神と霞と
身とやうのあはさるの吟
日照る河内乃あはとあは道
仙乃いかりとくく魚乃あは
鮎もや久米のあはのあは
海くくあはあは岩橋乃末
泉あは乃流まいつく千町四
小舟はとれ土籠すく魚り
あはとくく流籠とくくあは
ひまらうとくくあはあは
あはとくくあはとくくあは
春日あはとくくあはとくく
あはとくくあはとくくあは
あはとくくあはとくくあは
あはとくくあはとくくあは

燦々たる稲荷の玉にこそ縁 友仙
 瓶をくるとは目も分らずのほ 政法
 大なるわづらひなきを思ふ 可教
 焼めもありこめつふも有り 孝法
 鏡り金佛より此の神法 安法
 身患のひるふ女の之重なり 孝法
 吾念は後よりあはれ推のち 孝法
 りと惜むるに何れありて子 友仙
 らしむれば字は重なるなり 政法
 山乃理すげと一のお秋の月 友仙
 妻こひてる南建丸鹿の 友仙
 友仙乃例の絶し秋ごと 友仙
 ば妻の花かん柄はよむゆん 孝法
 雲のし海名の八景より幾とほ 友仙

名采な海濱はくらげのきえ 友仙
 後りともわく海鏡のつらと 友仙
 花金丸まうそ名もさしん結ん 友仙
 何れもまああし首途のつら 安法
 まつたはなも群も群の群 友仙
 毛いさふもさつたてにせ 友仙
 多のまいはいふもせふ 友仙
 庭路のわくは鞠のむらり 友仙
 根の末根がえなわも 友仙
 尾上乃奥へしつら念珠ひき 友仙
 高の世やこわらかそ 友仙
 野乃獵船のこひはありて 政法
 海童の清きとんかど月 友仙
 なまのやうありかたは 友仙

くらまは流るる水とてわが身を流す
 又物とて川や傍に谷を流す
 自中田天狗の定を流す
 とこそせよとていふは田楽
 やんらく風日吉乃神輿
 粟乃御供はるる
 祈禱とて花やうもいふ
 とうとうわらわもわが身を流す

- 季吟 十五 政信 十一
- 友仙 十八 正章 十七
- 友仙 十句 長久 一
- 安靜 十二
- 可於 十二

第三
 花

佐保地分はわが身を流す
 ひなとてわが身を流す
 去乃とて流るる
 坊のり月より
 暖極とて見屋
 籠の能乃は舞
 不作まふ
 田舎がうらも

正章

をいでも辭し新うき神遊 孝
見よ源氏乃武者乃けり 正
納受とも正八樓の法もま 可
娘しさうな侍鳩はさか 孝
人衆もかゝれあやう大留 友仙
名月乃夜人地りき盜賊 政伝
心して運入寶乃市九棚 正
法よひのむ侍もまそん 安
いひひく勅を坊之舟きり 孝
いふといひいひやく守く 孝
正味かき侍酒やと法乃者 政伝
侍後坊してと敷つめそなく 可
おうらふれどもとせ所りだ 安
歩義堂やいふむか味 友仙

持もさゆ色かろき書様 孝
又月五日も厚公候なり 正
百草丸侍り坊りともえ侍 可
今乃せまきと母ぶ津農 孝
七賢と徳ひく家あわら 友仙
周の美竹と節まらそそ通 政伝
孝前也われ侍御取もいじ 孝
少の義統地分んはあふの 安
かづゆつを中法のも法之 正
於て年あふし飛が後の物 孝
くしくと坊り家もなま又 政伝
さら子胡椒もなむく換 孝
打出る湯鏡を月乃和振 安
いしとくひよあひ日神の 可

仙より後乃枝巻は納せえ 堯
松がふふ蛇のいふし塚穴 聖
白居をい他せらるし折は飛 堯
いまい甲しなふ福来たる友仙
ひいふは好やよめつ首は妙 聖
しにふあおむしこひあの本 政
けしゆり大較かこそ八割は 聖
帝釈天としひくを神鳴 堯
夕のこを寝れ靴のあなま 友仙
日照うしなふし河秋の比 聖
三日月はありしはかきこ 堯
結も方はしめぬ高砂乃る 聖
とのつ子は山田と譲ち花は 聖
朝ハ矢橋乃らうらうら 堯

うしおきて舟と清小舟をり 友仙

流解しつりしゆり小橋原 堯
渡度火と原付さやまは海 聖
お杉屋とせりも今ハ油屋 聖
家とさり山崎をへりして 政
赤松せしむる奥乃らとり 聖
なかりわらむで舞やどが 聖
御流地は身てなせ鶴舟 聖
織梅するも弟姫の傍は 聖
痛珠救とありしは 友仙
急なつて葉を秋乃洞業 聖
鯨乃りもや魚しし 聖
せらやふし待路路の月よ 聖
穂よりそゆく糸文丸供 聖

いふにう國阿と洋に被のる 友仙
振南とくふわらう 水風あ 友仙
菑とより 慈慶はもりて 友仙
羽おやれ鴨や塩名はす 友仙
雲気なりとうめたるは 友仙
書物乃らりとうら 友仙
老しなまをう 友仙
月う 友仙
物や 友仙
名なり 友仙
いふれ 友仙
月は 友仙
涙あ 友仙
ちれお 友仙

かこころさんて 友仙
父ハ 友仙
半歌 友仙
菑 友仙
ふり 友仙
百へ 友仙
二条 友仙
でい 友仙
そく 友仙
時ど 友仙
ら 友仙
も 友仙
目を 友仙

双六乃さじくゆりやうりん 政信
新葉れ神傳る系れ神 友仙
之破れ雲をせよまうみ理れ声 友仙
寸白もなつてう舞れりるら 友仙
舞やうまの舞のさうり出 友仙
味唯者流のゆりう肌 友仙
いれりも縁の目かよに照り 友仙
之すやすごせ流大星れうか 友仙

正喜 十七 友仙 十句
季吟 十句 安翁 十三
長久 十八 長久 一
可頼 十二

改信 十一

弟曰

郭公

な風折るるを名風子規の声

さくハ采所れ庭乃卵花 正喜

阿合乃續つて神れ錫作と 友仙

今や逢しれまの敷がらり 友仙

紫云んれおの末座の吹の舞 友仙

大呪をのち小呪をうらも 友仙

神乃らち極る極やえぬ 友仙

月影り度向去乃山あり 友仙

安翁

吹流乃雪子約應す人あそく
交野のくくくいそく
霍紀クワキやせんり幸乃借れぬ
のりての川テニヤカ典業のりえ
新しき丹波布りの笠うら
首途のりそくひ乃坂あえ
山々の掃宿の心流のりえ
富樫の酒といそくそく
回ひのりかびのり
多外したるを
鏡やひ秋小神志ん
月りブダシのり
あつとニニナウのり
去論とニニナウのり

神の流せし黄鸚啼つ
急流のりしトウ間ニの時守ニあ
あ又連歌ニのり
あつとニニナウのり
鞠の秘ニのり
危ニ下りニのり
戴ニのり
遠来ニのり
人ニ替りニのり
一合ニのり
文ニのり
菴ニのり
乃ニのり

西の海に逗留り分りて 友仙
海より遠く東の港乃百姓 友仙
門は乃あど蘇乃せきいづつ 友仙
嘆れりれ嘆れりれ嘆れりれ 友仙
月送り寝つ解意と寝おほ 友仙
夜ありやめいひぐれつり子 友仙
吹り流れ流る時としりと六 友仙
波乃流るをゆき舟船 友仙
昔の事共々いふあり候方 友仙
末世りいぬ候か乃思徳 友仙
漢城まで八程をきくとお国を 友仙
ろくろあやとらりいづり月 友仙
散むのい瀬はほろ柳鏡 友仙
境の芝よりあつるまう也 友仙

永日よ善徳のつらや地りて 友仙
内裏乃つらりよふくくおぬ 友仙
漆のの葉とくー刑ア御 友仙
田舎よりりれ糸地ハ早下 友仙
麦飯汁の海をといつて 友仙
泉郎人まをを候ふと 友仙
居公の地糸海糸糸は行り 友仙
親とつるまへは珠板とる 友仙
さすくは着は二葉も足著 友仙
兵庫の里ハ川の知り不 友仙
しは不ろ懸昌とては作書 友仙
糸もあなつる乾つてくけ 友仙
鷹金も月乃杖つてそ名 友仙
骨とくばくく門お撲り 友仙

夢高きり越しつゝのめりて
床一層目らふ人代侍ウモコケ うれ
多風物約庵吹あつて御軍 友仙
夢思物うりりる見えぬゆめ 政信
とく少の流海ても落葉もコトヤ 正家
眠乃と海舟糸無乃うら 義
大船漕も自中よめやて 親
せんくは波れひくく女敷盛ウツモリ 素
吹とあまの露のこゝ樂の能 政信
難波乃妹をのすつりよ 素
又のりて帝御乃月叶胡コ 素
まはゆ格子のあふりあまイ 友仙
神木乃母もさくさるあは 素
くらやとを風まつりあふ 素

け小志に鹿乃仲井鷹乃声 素
行乃慈い毛次弟あやり 親
笑難もなつてとく夢家の 友仙
迎支あつりもさくさるあは 素
草難乃銀の流あふりよ 正家
浪もあつて民いゆ小ゆく 政信
ささ屋の寄母乃身まはる 親
月乃りしく狂乱の神 素
尺念もえ流りり一魚帆 素
蓋せそとくありの食つて 素
ゆせとくあつてとくあつて 信
困もあつてとくあつて 素
やせりとくあつてとくあつて 素
青いあつてとくあつて 素

賢人の氣よは河を操るらん 正
とくは心とくともあまよひなり 正
ひりよありと備て凡ゆる演磨の 正
公家乃目つけし海吉のふれ末 正
秘の守るはる者京氏に秘わむ 友仙
たては心堂乃前の扶む 正
徳進も天狗と云はれ遠く 正
上乃能破りせむは心 正
業行の糸糸し神はふたを 正
まづく夢の心とくともあま 正
宵月付ともわはれいとよ 正
躍り出さぬうらむれ者 正
乾珠の又人の布やばしん 正
法徳と絶つ人もせず 正

井よは心屠蓋の敷と打られ 正
えとく酒の心脾の勝 正
わひさうもなふに腕のあま 正
猿まはしとばをせず追出す 友仙
ねてよ弓射のまももはらや 正
芝居よいたく懐幕とくえ 正
度をもとめて心算とちうはま 正
耳ををれいとの鹿乃音 正
穂山と能まるはれえとあけ 友仙
明河河りうのる月影 正
仲磨の別は情じよ小敷 正
あつとくいめは心算とくともあま 正
春とくよ又もつじ心算 正
丸とつりてえうらむれ者 正

わがまははんと驚りい初瀬山 一丸
又まて右出と流るす神 虎
ま川蔵た舟小神と今分ちし 政信
善導寺大御中のあふ新慈三子
う気まへのありだてて松さか 虎
とあとし安の甲也も御ひ 虎
老乃坂で入神舞あわさ 虎
川よりくねん重言代乃太刀 友仙
あひひは信衣と三根の引え 安野
ま乃泉流系れ次一 一丸
水晶乃やうの岩根は露霧り 季花
弁才天れまぬり月 聖更
くらあひとよるもこれぬまの 友仙
うるあひのあひは 沙汰 政信

あつかりと際あめは小田のあ 可利
うれうらんか舟清ししく 虎
冬じまも控根とせあ土流 聖更
完りう氣乃牙あはいつ 季花
夜よあて島の時ハあはは 政信
人うし月入り入あらん 安野
梅いてごくの指身あ 虎
神か母もゆりす所産あ 友仙
うの波乃急うをさあ不知今 季花
なんえとんをわらん 虎
舟連ともつあはじの時より 友仙
そ実水時と分り入る神 聖更
あ度ともつあはじの時より 安野
麦秋めける時家乃大徳 季花

二十

題詞や藝へゆりて書きたるは
 佛法ハな成禁昌乃以可
 大座乃物系や夏は清らん
 う風おもあつらり路 改信
 りる記しよすかろふ標の
 ひろきてはむ内様なりかり
 策乃法の臨吟しすい永ま相
 御性書るもどく地乃りん 友仙

可頼 十三 正章 十六
 友仙 十八 李吟 十五
 友仙 十二 友久 一
 友仙 十三
 安勢 十二

弟六
 雁

薄夢乃空の鷹やふん文字
 いはる友信と嵐乃落葉不 友仙
 少の厚月いし秋の落葉は 友仙
 夜拵乃らぬ秋の落葉も 友仙
 月影もさすくよんゆり都屋付 安勢
 つまきも寐ぬれむの露所 可頼
 野等指乃足跡あるる書は 正章
 りくめとや出寸天夢 友久

改信

宿まする格近の指多き麗に 友仙
尾の書院乃うりの家来一 政法
隈も石の満れつてさき 孝正
高松出舟の波れ高橋 孝亮
かろくとつらのの束のつて 可親
幸折て供りりせぬの蘇 安翁
大名もふぐらう一玉祭 孝亮
焼籠もろの月入るの端 正家
紫のめく徳守の茶知さひ 政信
石上りやあるまゝ太刀丸 孝亮
跡つて内山伏の末なりし 正家
物を捨の紙やくくはる 友仙
おつめてかえぬおのの 安翁
くる古心乃音をまめく 孝亮
らんかむと啼と啼よりあむ、孝亮
空想や枕を乃廻ひんら子 可親
深山の人傳はるゝ雲の陰 孝亮
暑根乃水漲さくさく發心 正家
氷撥く貪欲垢や落すん 友仙
たぐれまじとひひあむしり 孝亮
けりひあるも字の内ねとど 可親
横河がら守てとらる武家 安翁
さくまひく徳承乃格乳の 正家
れららひく矢のひりく 孝亮
今迄もの小徳念代持立所 孝亮
兄乃の前後と勤する時 友仙
梅乃実成なるまゝあひ月 孝亮
陰粟乃雨と信とくくら 孝亮

都公が在しての八拜三つん 安
死出乃出過の便宜を分交 安
神もや相介つれ河三途河 安
素くくつしつしめりる 安
お基と守とつしに 安
切煙登乃乳れ中飲 安
建水乃やかなふ地と 安
門くありさ 安
西蘭島より乳るまな 安
後せのふ乃のつり月の 安
御松のちわめ 安
少たのりつり 安
徳神のりも 安

水日よいし 安
神乃後や拭 安
塩竈より 安
ひりしと 安
わ鉄のし 安
料理乃 安
閑目 安
解更 安
少るに 安
百乃 安
月よ 安
家急 安
ひつ 安
ひさ 安

山崎のなまこ酒を飲むに
 菅井スカ井常行のなまこ酒
 何れもいふにじや枝持とのほ
 公家八喜フナロ小元亭ゲン乃す清
 舟出りわの釈書とせなると
 どのうとどのうとのりぞ弘明
 花くく地獄クニキの地獄の道
 出果又出る川曲舞の神 安政

政法 十三 可頼 十一
 友仙 十二 正尊 十六
 長光 十一 去久 一
 季子 十二
 安政 十二

第七

月

ひまの月透スキ月を月
 終乃復トガ又り終る秋風
 冬近之願オホキ以申し
 旅カサリの川馬カサリより
 海カイ香サリも瀨セ名ナの久キウ乃ノ交マ背セの
 徒シホ下シホもゆと定サはゆと
 及キ肌ヒも下シホと東トウ風フウも下シホと
 櫛シ々シ々シ乃ノ言コトたりと

李時

とわがふ縁際縁つこふ母の條條 正徳

精進の産ゆの糸糸 正徳

自隱自隱 友仙

花散花散 友仙

くすめくすめ 友仙

糸乃煙糸乃煙 友仙

約宵約宵 友仙

明石明石 友仙

林麓林麓 友仙

鬼鬼 友仙

月月 友仙

元元 友仙

又又 友仙

名名 友仙

花花 友仙

ひひ 友仙

軒軒 友仙

連連 友仙

橋橋 友仙

六六 友仙

来来 友仙

破破 友仙

弁弁 友仙

獨獨 友仙

盆盆 友仙

よよ 友仙

後後 友仙

まま 友仙

まま 友仙

まま 友仙

杖をのぶらりりきりては 夏
何りうひと地人そむく 秋
くまの也 雑候の緒 友仙
卒夜むらりも 卒又夢の極 季
金利辨の利根かきくも身自見 秋
のそへらぬしひ少く秋乃ぬ 安
二千里の舟も星は月の書 政
紀の語の演といふ廣の神 臣
かきとあし僻まふいふは 季
葛邊乃田落と下子の地徳 秋
白雲と去た久くあふまひて 夏
なるとひのわたり百姓乃れ 秋
と一毎よ野藁やの花のりも 安
は連りありする旅のちの物 友仙

白散と結まとも御遠有は 秋
かゆせと身取乃歩とそらく 夏
急暴の伴留の住居とまは 政
いそ〜〜うら〜〜る身と名より名 秋
舟并やめでとて創るひまの足 秋
干と替乃殺うとるに桃燈 季
つら〜〜の絲盤雲の枝をねく 友仙
大智あはれり一乃谷あひ 安
氣度平安城のちあ月 秋
博士りとりん秋乃あをい 秋
歎といまうら〜〜のほし流や 季
萬乃種うけう〜〜は成者 長
神の氣目〜〜はうら〜〜相光 安
而乃外よゆ〜〜別海 政

出稽り乃活ハ細くもつる事也 友仙
 中々くぞな所守乃ハハ乃 友仙
 穂積ハ水砂糖やふさふん 友仙
 せんいありくくどくうらぬ 友仙
 五月ハ具足乃脱ひもるびて 友仙
 身ハ害せあやちしちの矢 友仙
 幾去りくわらぬ我の法今も 友仙
 紅ハ河原ノリノゆる根 友仙
 鮎つじあらん事も似家もそ 友仙
 門流のよある文月のりし 友仙
 山科や雉の時ふの夕ぐれは 友仙
 常あふよふのる文れも隠 友仙
 花乃はりそ等の御教よりく 友仙
 相の紋ある幕とよきの日 友仙
 鳳凰もくハ女まの蝶乃舞 友仙
 柳葉もりらうくひすの種 友仙
 釣ねも谷より見じちあふ 友仙
 合剛山とい海る山乃若 友仙
 良物乃そそ綴りくる歌里 友仙
 石垣よつじ岩乃あやふさ 友仙
 米松乃どんぐい連る漆口 友仙
 雑岐のとももくそ世昌 友仙
 よひありハ行橋乃礼と推定 友仙
 病者乃門へく事所山や 友仙
 びひあふの養との根な純 友仙
 ひす念ふこまの花草も業玉 友仙
 親ハ根育乃そハ名所也 友仙
 山科もすき疎うらあひ 友仙

彦彦よつと祿一宵もあはれ友仙
 清少納言わかれたる祈 孝
 約たるやうなるやうに也也 孝
 皮肉のねるこもあひたす 政信
 板木おかし守源なること 安
 見ゆわし見ゆわし若乃氣 友仙
 鞍ふらや鹿乃海の浪 巨
 すじ魚の名も山椒のうと 小

木子吟 十四 友仙 十三
 正章 十七 孝 十九
 安靜 十二 孝 一
 政信 十二
 可頼 十二

第八

菊

そのちかちかひわたり皮草
 新酒とのそそいさそそ 孝
 珠乃魚の又丸月よるは 孝
 ねすまむむの急くどく 孝
 霧とくどりとも靡ぬを 友仙
 そよ木とたつらるる川 政信
 浦とくどりとも 孝
 不覚ふらふもおかし 孝

鈴もあまのまきぬまの場々 孝
玄の乃翁新元終の船の雲 孝
凡種とまのん垣抗ゆひはは 友
りり一航り用んぞす向 友仙
一めんは氷ごらふ所流流流 正孝
風のりありやすきさかたき 孝
おまと守り秘人乃府すは 孝
出陣太子のつゝさ御威勢 政伝
まげさうまも強中お葉 友仙
月乃中後も月約のりけ 友
秋身入り川らふまき園橋を 孝
あふた流るる神の香水 正孝
花のくはのじかもつとめ兼 孝
志のり志最世と志愛の人 孝

うらりのと約目のりり山はま 正孝

清あがりしつらひの救く 友
鏡も何とさまをど流所心 友
一撥りも所城乃素口 政伝
山坂とるよ糸入掃巾之 友
籠のりおる八十津川の急 友仙
かめさそまにきと五極 孝
源氏とれどす以乃中お 孝
あやまも流る八幡の津のあ 正孝
死よはらりしとやとくは 友
縁付すれは十九乃もと家 孝
あすの園まもららんと神 孝
御手洗の糸りやあやと照月 孝
森の本向と流る源を 正孝

夕ちんは露ハ松乃玉小似く
鉄炮乃多しよまがり小神鳴
南船や鬼界が橋よ是の尾
糸を丸よりゆる杖木
きよめ杯は燗の菓とある大正
左宿がすまゝの破ハあはれ
秦氏乃壺の口をつくく
秋のふさくめ之乃同のあ
う色くのよるふ月の初は
のよわら雲ハあやのめ
まのもまぐくそハあはれ
閑東やまゝハ敷百里そあ
月花乃云あもつらる美物よ
去のよりのハはれよ二条家
あれ

木少ハせばよかひ乃内いよ
入部乃道でひくわらあ
御舟よ解つてあはれ
せらごの殿乃あはれ
琉球よ宿守法ハあはれ
ひ乃よ志ひくひくろの味線
き秋のよるあはれ
宮司が毒より秋遠すらりし
くの煙籠道てもきよめ
後ハ廻りハあはれ
杖でせよ海のつらもあはれ
よれくろの疾と振ハあはれ
風の気も月よあはれ
秋もあはれハあはれ

沚厖や秋の行橋は穠まじ 正夏
小鷲乃犬ハ引のけとけ 正夏
紙ハウと死子ハ別乃屋り取 可頼
嫂ハ乃折りてと心置め 政信
かさざりありとや守新梳 孝吟
乱髪りもたぐる名番 友仙
葉乃成花のやうなる風流 安斎
の葉枝をまよりいづとつて 正夏

安斎 十三 政信 十
孝吟 十五 友仙 一
正章 十七 可頼 十二
友仙 十一

第九
雷

白虎の竹乃林風まこころ宮
叢乃玉となごゆや統 正夏
りよくと完わゆ測のうすい 友仙
んす根とと心置めやうと 政信
是りては夏乃とらと踏を分 孝吟
月あるさしりまよする誠奏 安斎
穂乃目は暮舎よまのよの葉 友仙
牙雨めそく和音の葉付 正夏

友仙

夕露乃そくく槐乃葉と感
汗あじじとてりすなり
抱乃葉と土用のうらふはせり
りし肺布やたがふなり
さねよらふ風もかいて
麝香はしめ人香るなり
扱よ秘苑のまきしはる
くくすく庵に将乃あり
悪乃捨く陀佛と名を授
槐乃彼者よ equal 乃
のまのらるるぬ茶の子なり
砂糖のやうな漢の露を
かふるまゝの紅なりやう
融乃おとくうらふとて
友仙 友仙 友仙 友仙 友仙 友仙 友仙 友仙 友仙 友仙

日し永支淑音や女乃葉
息もつぎあふあけ小行に
音よこくあやめとて
くろたがくし漢乃中
二乃町よまゝ玉葉とて
鳥乃も出せ市乃棚
河乃りも月復ら小乃
妻乃葉よもまふ秋の浦
橋のり喰くし道乃わら
志賀山乃とてりわら
新ひくし棚乃やあや
とてた暮乃あゝまを
取智乃漢はに村乃
不圖乃及さす乃漢波乃

のまじりやとれおかるもあつる
書院乃さるは昔れ物あり
橙花もやうりて亭もあつる
吐寸ハ秋の一日乃友
月まても百韻まで弄して
脚乃お中の一をあすは
穴でしよもいふおとあつる
る乃やまひ屋もあつる
多岐や飯で熱くわす
乞食わすしじ能也の國
辻堂ハ谷乃價ぐそつ
地蔵がさしは茶もあつる
舞ハねつめもあつる
楊津の邊りあつる

御燈もあつる
方丈り秋乃葉のさく
式部が坊のあつる
山乃又遊ん宰府へ
淡養とせしりあつる
しわらび屋のあつる
新橋りくろくかひの
長巻もあつる
本乃般乃あつる
科乃あつる
まろもあつる
わらわらあつる
之乃あつる

年々より京との世に侍るも
難者といふもさす人れ被
よるもあやまりしむす事
落ひもあつ約計乃京
余念なき蹴る新巻の神意
幸何乃猶やまれまつりわ
の心も嘆かたれつるあま
沈むるもあやまりしむす事
家柄乃新巻の神意
八幡交れ秋の唐前
裁たる三木のさくさく
お礼とPのくろく重
能事くさくくろく重
岩をくさくくろく重

おらし乃侍家ゆらぬ事
難者といふもさす人れ被
よるもあやまりしむす事
落ひもあつ約計乃京
余念なき蹴る新巻の神意
幸何乃猶やまれまつりわ
の心も嘆かたれつるあま
沈むるもあやまりしむす事
家柄乃新巻の神意
八幡交れ秋の唐前
裁たる三木のさくさく
お礼とPのくろく重
能事くさくくろく重
岩をくさくくろく重

家多分後承知乃道すう 友仙
 庭中よりゆえ日の雨 正夏
 雪の梅乃舞登り丸をまき 正夏
 糸柳のまきとこれけりこれ 正夏
 河よふれまきいにもまきをの雪政院
 ありまのりく月ハありら 安政
 猿猴のまきまきまきあふま 正夏
 上と下との木実おすめり 正夏
 猿登りやたすのまきの者 友仙
 貴者総まきまきまきまき 正夏
 乃すむいまのまきまきまき 正夏
 奉公やひまのまきまきまき 正夏
 峰のすまきのまきまきまき 正夏
 ままのまきのまきまきまき 正夏

いしりまのまきまきまき 正夏
 小えのまきまきまきまき 政信
 風はまのまきまきまきまき 正夏
 かゆりまのまきまきまきまき 正夏
 純ひのまきまきまきまき 正夏
 猫をのまきまきまきまき 正夏
 母をのまきまきまきまき 正夏
 穴をのまきまきまきまき 友仙
 窓をのまきまきまきまき 正夏
 おたかくまのまきまきまきまき 正夏
 庭をのまきまきまきまき 正夏
 院をのまきまきまきまき 正夏
 院をのまきまきまきまき 正夏
 月をのまきまきまきまき 友仙
 更りのまきまきまきまき 正夏

昔やしらまへ毛越乃らさぶのん 政信
 唐人のかんおたしひの野菜 友亮
 馬くふさの髪はまはるは遠り 友亮
 法神をいふ無なる川なり 友亮
 隠れあひのれもりの所教ら 友亮
 め此流りののかり玉殿 友亮
 お中乃地せ村をんをづりよ 友仙
 新念の橋ハ巻くつり川 友亮
 二女ねひもあつちひり 友仙
 をとる下とさうりたり 友亮
 折馬慣子さうり集りよ 友亮
 月花の涙と女おそまつり 友仙
 仇保娘さるやいし守情巻 友亮

結海も霧乃らるも無双へ 友亮
 冬今うささむいりな者冬 友亮
 美林よ霧ハどまへむりこ祿 友亮
 さよ更波乃津前乃橋 友仙
 宇治川乃月はまきえ氷捲て 友亮
 林も惜らむうる乃御茶つが 友亮
 同朋が書もものり炭乃も 友亮
 長刀とりら拂ふ山草 友亮
 庭は清めとせし喜まはるの心 友仙
 せらぶりやいとすし危地は 友亮
 細うさくたなごえふさるさうり 友亮
 傷入すくななる時えりある 友亮
 のかりゆりあまたぬの首て 友亮
 ね思ひくろくを海乃町 友仙

戸柳の浦をさう下の國かの國 彦
まも從者もたが念をの能 彦
本草也抱へし侍もあらん 彦
たんととの心も持たしひく 彦
昼食とをさるあへんをせと 政信
今山花乃の香を信するなり 彦
至真の似せう小食の色紙紙 彦
為と世に結しそ少守がれ 安政
不動の香と焼けの秋乃佛あ 友仙
月々支法ひりり花明 政信
純まのあがるそとそとと 彦
車乃紋りこ所波乃紋 彦
垂布と舞丸をよまけきり 政信
鱈にるりとしの徳の前 彦

多引の分らるるに守徳 彦
このあきごとももよまあは 政信
字はゆり又所ひりし小御田 友仙
いとよたたく夏乃天山 安政
松もつすもあはれを呻う部云 彦
松子あしといふも今かたなり 彦
を法の顔乃鏡ひするももせ 彦
庭ごあられと名目いけは 彦
結介つるれりのくを良づ 政信
よめいふまの悟れいとう 彦
花ともあき清るるあはれ心 安政
かこまのあしが二夜もも 彦
中月の空り名はるるあはれ心 彦
律りしらるる路絶や玉琴 彦

公家氣の秋は美なる榎の苑 友仙
車乃の麓は河が流る坂 安翁
空を飛ぶ鳥と御焼火の煙は 友仙
救はるる鳥の飛ぶのそら 友仙
毎日の人歩もたはる麓の草 安翁
今部といふむいささうのふ 友仙
花乃種り大鷹小鷹居させて 友仙
鳥なりなる道は紙八年出 友仙

正章 十九 政信 十
友仙 十五 友丸 廿
季吟 十七 友久 一
可頼 五

安翁 十三

近江

鶴乃果の山松より河のり 葉 友仙
義鳥の危り他は遠原に 季 友仙
六角あふふのり世の若さ 友 友仙
まふふはふり 叶乃日乃 友 安翁
りか小秋のふふ十の月乃 葉 可頼
長くくさくさ八秋乃身 友 友仙
流や高遠より満うる 友 友仙
親をとりし浦のね 友 友仙

右ちりの誦讀連弁にああ
交仙先生ためましく信一
庵とてしめさるしゆれ多め
を吟乃老翁と此るれ長
いやをえあめれちこのか
下部ましくををあま
うれ遠れをくむりり
乃熟うすりう一の驥
につくものり休南渚元
くもめうト養とまの
此のいをくく添削を
世合息をこいぬくち志の
れやいもせいの

らとていふくにああ
ひみれんまあも困小杖
つましくまきあの
まきうのれ向をきし事
まれりもはれいもいひ
まのまれおのまうふ
ねるをまきうのり
にちうをるいぬらせり
友仙先生もたのいけ
をいひあがあま
まきうのりあ
いあまのやま
まあまのい
まあまのい

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or administrative document, written vertically on the right page.

明曆元年乙未五月吉日

敦賀屋久兵衛開板

安政二年五月

求之

喜
田中

春日御内人
田村平三郎

持主

春野

田村平七郎
同 平太春野

田村武